

日本語動詞現在時形態論(一)

マッオキヌ

吉町, 義雄

<https://doi.org/10.15017/2557060>

出版情報 : 文學研究. 15, pp.39-85, 1936-04-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



日本語動詞現在時形態論 (一)

マ ッ オ キ ス

吉 町 義 雄 譯

譯 者 の 前 置

原著外形は四六倍判假綴であつて、灰緑色表紙を除くと扉二頁分、序説二頁分、目次五頁分、白紙一頁分（以上頁付無し）、本文一四二頁分、奥付二頁分（頁付無し）の露文言語學書である。表紙と扉とは同體裁、上方三分一邊に横に太線があり、上欄部の上方に露文字（後文參照）で四行に（「符は改行を示す」）

TRUDY L DAL'NEVOSTOČNOGO GOSUDARSTVENNOGO UNIVERSITETA L Serija VI No 9
L DAL'NEVOSTOČNOGO KRAJEVOGO NAUČNO-ISLEDovATELSKOGO INSTITUTA L Tom
I, vyp. 4.

とある下には羅馬字で同じく四行に

Publications of the Far Eastern State University. L Series VI. No. 9. L and of the Far Eastern Regional

Institute for Scientific Research. L Vol. I. No. 4.

とある。下欄は上方に露文字で四行に

Prof. N. P. Macokin. L OČERK L MORFOLOGII NASTOJAŠČEGO VREMENI L JAPONSKOGO

GLAGOLA.

とある下に羅馬字で六行に

AN OUTLINE L OF THE MORPHOLOGY OF THE PRESENT TENSE L OF THE JAPANESE

VERB L by L Prof. N. P. Matsokin L of the Far Eastern State University of Vladivostok.

とあり、少し餘白を置いて下方に露文字と羅馬字で三行に

Vladivostok—Vladivostok【羅馬字】. L Tipografija Dal'nevostočnogo Gosudarstvennogo Universiteta. L 1929.

とあるのである。

内容は本文第一編(一一五九頁)五章、第二編(六〇—一二四頁)四章に分れ、各章(第七章は四部に大別)は更に二乃至二十節に細分されており(下側欄外に所々細註がある)、次に結論(一二五—一三一頁)、補註五箇(一三一頁)、英文摘要【SUMMARY】(一三二—一三八頁)、引用文献表(一三九—一四一頁)、正誤表(一四二頁)の體裁であるが、此の内で各章劈頭たる一・五・一二・二二・三六・六〇・九五・一一九頁及び一二五・一三二・一三九・一四二頁は頁付(上側中央)が無いのである。露文字は勿論新式正書法であるが、羅馬字の外に極少の何れも横書の漢字と平片假名とが散見する。Hofmann 以來の日本語歐文法が日本語動詞活用一元論を繼承するに對し、局部的には認識不足や誤解もあるか、

兎も角初めて多元論を主張する點に於て原著は日本言語學書中近來の一大論文なのである。別に英譯書とはある譯でなく、此の點は Oskar Nachod, Bibliographie von Japan 1927—1929, Leipzig 1931 の S.334 は誤解を起させるし、從つて雜誌『方言』第四卷第十號「琉球語特輯號」(昭和九年十月)一七九頁下は訂正しなければならない。出版こそ遂昨今であるが其道の人なら直に首肯する殊に我々には近付き難い資料なのであつて、和蘭は Leiden 大學の親日日本學教授 Johannes Kander (ヨハネス ラーデル) 氏の御好意により、其の御所藏本を譯者が暫時拜借、數年に互つて本誌上へ邦語化しようとするのである。

原著者 Nikolaj Macokin (ニコライ マッコキ) 氏は今や五十歳に垂とするブルジョア出身の人であるさうで、原著奥付によると外に一九一—一九二九年に互り十六種の論文を發表、民族學傾向の東洋學者且最近では政治・經濟方面にも及ぶ日本通として一廬の士なる事が分る。引用文献は可なり豊富であつて教へられる所が多い。Kodrigues の所論を Landresse 佛譯本で濟ませてゐるのは無理もないが、昭和三年刊行邦語文法書を無視しない點などは賞さなければなるまい。露語關係の大部分を除いては、多々羅濱釘付の身も昭和の文運は殆ど全部原書に當るを得る様である。

譯文は此の種の性質上原意正確を主眼とし、譯語も出来るだけ統制(但し『方言』前掲號拙譯とは必しも一致してゐない)を保つ事とした。Hofmann (英蘭文本共頁付は全く同じ)の譯者不明獨譯本(一八七七年、頁付は途中から少しづれてゐる)や Aston 口語文法の Kraetzer 佛譯本(一八七三年)の對照迄は譯者に於ても當分お斷りし度いが、Aston 文語文法は再版本(一八七七年)と Chamberlain 文語文法は増訂本(一九二四年)と(實は譯者が是等しか運用出来ないのだが)、Lange 口語文法は獨文(一八九〇年初版)三版本(一九二二年)と、Paut 口語文法は獨文本(一九〇

四年)や英文(一九〇五年初版)再版本(一九二六年)と、Mac-Govern 口語文法は Spaulwin 露譯增訂本(一九三三年)とそれ〴〵對照を敢てして置いた。本文下側欄外細註は幸に各章毎に番號が改まる仕組なので、譯文では各章末へ原文通りの番號の儘で纏め得たし、一三一頁補註五箇は各本文關係箇所へ挿入する事とした。術語や邦語さては引用文も露譯したもののみを以て通したらしい原著者の主義は譯者も可成的墨守する方針である。Chamberlain や Spaulwin も今や故人である事などは讀者宜しく了察され度い。符號も『』は「」に改めた以外は殆ど元の儘であるが、「」は特に原著原語(大部分は基本形に改めて)を示し、『』は原著に無いものを示し、太字片假名は強さアクセントを示すのであつて何れも譯者の老婆心に由るのである。活字の關係上露文字は凡て歐大陸式羅馬字(それも學術上國際的のものを選んで)に書改めたが、是に就ては念の爲左記を參照され度い。露文字を對照する事は是亦活字の都合上斷念而も識者には稍々冗長なる説明を敢てした。末尾圖表は勿論譯者の作製に係るのである。

母音

а, о, у はア、オ、ウ。ə はアクセントの無い時はアと發するのが標準的。對應する也行音には特殊の露文字が存する。

и, е, ъ は其儘で常に也行音イ、エ、ヨである。但し ъ はアクセントある時に限るが、符點は露文字に於てさへ書かないのが普通故、。とは可なり紛らはしいのである。

ъ は唇はイも舌はウもて出す音であり、西歐には普通聽かれないが、琉球地方には存し、又東北地方には似た音がある。對應する也行音には文法上前掲ゝが該當する。

。は譯者が便宜上工夫使用するものであつて、阿行のエである。殆ど外來語のみに現れる。對應する也行音

は前掲 e。

スラヴ言語學上所謂「硬母音」は a, o, u, y, e であり、「軟母音」は ja, é, ju, i, e であつて、前述の如く對應する。

二重母音 aj, ej, ij 等が其々存する。

長短の區別は無いのであつて、強さアクセントの存する所を他よりも稍々長い目に發する。アクセントの位置及び移動は英語と共に頗る困難であつて、符號は普通書示さない習慣である。

子 音

c = 茨 ts, 獨 z, é = 茨 ch, 獨 tsch, j = 茨 y, 獨 j, š = 茨 sh, 佛 ch, 獨 sch, ž = 佛 j, x = 獨 ach-ch, 位の外は別に示す迄も無い。結合音 zc (但し發音は z に近くてもよい) には特殊の露文字が存する。

有聲音が語尾にあつて而も句切れの時は、無聲音となるのは獨逸語の如くである。

音聲結合をする時は種々通則や例外があるが、有聲音と無聲音と接する時は、獨逸語の如く逆行同化を採つて、bapka te bapka, ozyv te oaz'i 等と發音される事だけは記憶せねばならぬ。

所謂「硬子音」即ち非口蓋化子音(普通のもの)に對應する「軟子音」即ち口蓋化子音(也行拗音に近いもの)が存し、書く時は元來各硬軟音符を子音の後へ附して差異を示すのであるが、前者は新式正書法と同じく分離符として語間に存する場合にのみ、符を以て示せば足り、後者は凡ての場合特殊露文字使用法の代りに同じく、符を以て示す事にする。

硬子音の後へ軟母音が直に續いて書かれる時は、實は軟子音の後へ硬母音が續く音聲結合となるのであつて例へば menja te m'en'a と發音されるのが原則であるが、語間子音の後に硬軟音符が存する時は後續軟母音は該子音を軟音化した上に自身は矢張り更に獨立した也行に發音される。又 c, š, ž は常に硬音、c 及び

は常に軟音なのであるが、史的關係に由り一見不合理な正書法を用ゐてゐるのである。

外來語

殊に固有名詞を寫す時は一種の慣用法があつて、就中露語に無い子音は、例へば *h* 音は *h* 文字として、*ch* 音は *ch* 文字としてする習慣である。

英國派術語用法一覽表

著者	Aston		Chamberlain		Sansom
書名	Written	Spoken	Written	Colloquial	Historical
未然形	Negative Base		Negative Base		Negative Base or Imperfect Form
連用形	Adverbial Form	Stem or Indefinite Form	Indefinite Form	Definite Form	Adverbial or Conjunctive Form
連體形	Attributive Substantive Form	Form or	Attributive Form		Attributive or Substantival Form
終止形	Conclusive Form	Present Indicative	Conclusive Form	Certain Present or Future	Predicative Form
已然形	Perfect Form	Conditional Base	Conditional Base		Perfect Form
各國術語用法比較表(相對的)					
日	語根	語幹	語基	語尾	接尾辭
英	root	stem	base	termination	suffix
獨	Wurzel		Stamm	Endung	Suffix
佛	racine		radical	désinence	suffixe
露	koren'		osnova	okančanie	suffixs

序 説

本著作に於て著者は日本語の最も錯雜せる問題の一つの力相當の解決と、そして其によつて、日本語に兎に角興味を有し又日本語を教授する人に、此問題に於て衝突が起つてゐる不可得有る錯綜及び異説を探究する助力とを、與へようと志すのである。

第一編に於ては新文法の異説と矛盾とに於て舊文法が演ずる役割を指示すると共に、現在時語尾に就ての新舊歐文法の見解が解説されてゐるのであつて、加之現在時語尾「得る」説が解説されており、其薄弱な方面と矛盾との凡てが記されてあつて、最後に獨立の探究的な章が述べられてゐるのであり、其によつて、現在時語尾は其形と活用との凡てに於て形態質ミである事が解るのである。

現在時語尾「得る」説には日本語歐文法的展開によつて受身又は受身・可能相の「在得る」説が連結されるが故に、第二編に於て著者は「J. Hoffmann によつて初めて述べられた體裁に於て解説するのであつて、それから受身相形態

調査を與へるのであり、其によつて、此相の接尾辭は現在時語尾に何等の關係を有しないと云ふ事、そして受身動詞に於ては現在時範疇が、凡ての其他非受身動詞に於けると同様な形態質^ミによつて標記されると云ふ事が解るのである。

J. Hoffmann によつて述べられた説は、其起源によれば古風の受身動詞であるらしい或第二活用自動詞に、其現在時終結形が對應第一活用自動詞同上時稱終結・限定形と同一である第二活用自動詞にも亦、最後に特に可能相動詞にも觸れるが故に、著者は、是等動詞に於ては現在時範疇は動詞「得」^ミと何等の連結をも有せざる同一形態質^ミを常に表現すると云ふ事を明示する爲には、其等の形態論にも亦關係せざるを得なかつた。

是と共に、J. Hoffmann 説は其々の體裁で殆ど全現代歐文法に採用されてあるが故に、著者は後者によつて解説されてある次第を検討し、加之其等が「哲學的」思索以外は言語事實と思はれる何物をも與へてゐないと云ふ事を顯したが、其結果として著者が現在時語尾形態及び受身其他動詞構造の領域に到達した全結論は明瞭に成功してゐるのである。

II x . II μ

浦鹽斯德

一九二九年【昭和四年】七月二十四日

目次【省略】

日本語動詞現在時形態論

第一編 現在時形態論【一—五九頁】

第一章 一般註解【一—四頁】

第一節 現在時語尾に就ての問題が何故大なる注意に値するか【一頁】

B. H. Chamberlain [B. X. Chamberlain] 【^イ「チャムベリン」】が現在時、E. G. Spaldin 【^イ「スパルディン」】教授が肯定確實叙述形と呼ぶ日本語動詞形語尾であるものに就ての問題は多くの理由によつて、歐羅巴及び露西亞の日本語文法に扱は

れてあるよりも、大なる注意を分與される可き價值がある。

第一には、以下に於て解るであらう様に、當然期待されなければならない筈である同意と云ふものが此問題に於ては觀られない。異れる著者達は第二【後出】及び第三【後出】活用に就て話が進むと、其を様々に解決するのみならず、同一著者達が現在時の二箇の異なる語尾を同一動詞に對して認容してゐて、不定性と二重性とを顯してゐる。同上の此不定性と二重性とが既に本問題は日本語文法に豊富に存する論争問題の一つに屬する事を語つてゐるのであつて、是が爲に再検討を要するのである。

第二には、現代歐文法なるものは日本語舊歐文法によつて此領域に於て配置されたものを殆ど悉皆繰返してゐて、加之後者の斷定が如何程正當であるかを説明する何等の企圖をも爲して居らない。

第三には、本問題は第二活用動詞現在時終形〔zaključitel'naja forma〕【conclusive form 終止形の事なのであるが、他の術語用法との統制上敢て本譯語を以てする】及び限定形〔opredelitel'naja forma〕【definite form 連體形に當る】語尾「得る」(u, urnu) 說〔polučitel'naja teorija〕と受身・可能相〔zalog〕【邦語露文法では質と譯してゐるが、voice と別に異らぬ故本譯名を以てする】「在得る」(byti-polučitel'naja) (aru, arun) 說とに密接に關係してをり、其が爲日本語動詞形態構造一般に觸れる譯なのである。

第四には、様々の形態組成動詞を一に混和してゐる是等諸説の「哲學的」起源なるものが心ならずも懷疑性を暗示したり、批判的に教唆するし、其再検討を促すのである。

かくて、本問題を考究するには充分に根據が存する次第なのである。

第二節 本論對象としての問題の形態方面【二頁】

併しながら目下私が其形態方面に、其も特に全四文語活用の及び其全終結・限定、終結及び限定形の所謂現在時に對して同一語尾が存するかと云ふ事に、又は活用の如何とそして終結に於てか限定に於てか動詞の與へられた形の如何とに依從する其等の幾何かに存するかと云ふ事にのみ、興味を有するのを辯明して置かなければならない。配置されようとする所謂現在時形態質〔*notiena*〕又は諸形態質なるものゝ起源問題の吟味と云ふものを、私は他日迄殘して置かうと思ふが、何とならば此最後の問題は日本語全文法構造の様々の品詞間關係や或は其分化や進化にさへ觸れる事となるからである。

第三節 「現在時」なる術語の條件【二—三頁】

「現在時」〔*nastojasčee vremja*〕なる術語を、此形が現在時を實際に表現するかと云ふ考慮には入らないで、私は條件付で採用する事とするが、何とならば最後の問題の吟味は日本語が時稱範疇を表現するかと云ふ一般問題と連結してゐて、其考慮は本論範圍を餘りに擴大し過ぎる事とならうと思ふからである。

E. G. Spai'vin 教授と G. B. Sansom [D. B. Sansom] 【サ^スサ^ス】とは日本語は元來時稱範疇を表現しないと斷言してゐる。既に何年も組織的に此範疇無しに濟ませてる E. G. Spai'vin 教授は是に連結して、「現在時」を「肯

定確實敘述形」〔utverditel'naja dostovernopisatel'naja forma〕なる術語もて取替へてゐるのであるが、⁽³⁾ 時稱範疇なるものを其解説に於て矢張り抛棄しない。G. B. Sanson は「現在時終結形」なる術語を「述語形」〔predicative form〕なる術語もて取替へてゐる。⁽⁴⁾ もつと以前に於ては W.〔U.〕 Aston 【アスタ】が「終結形は時稱を表現しない」といふ事を發見してゐた。⁽⁵⁾ 現在時形は現在時のみならず過去及び未來時をも表現すると指示してゐる B. H. Chamberlain は其にも不拘、此術語を墨守してゐたのである。⁽⁶⁾

私は個人的には此術語の特別な擁護者ではないが、所謂現在時が文脈に依從して所謂過去時や所謂未來時を表現すると云ふ事を見逃さないならば、此術語を維持しても或は大なる不便は無からうかと考へる。⁽⁷⁾ 私が此術語を其正確に構はず使用するとしても、其は其維持なるものは吾々に、一術語を他術語へ及び其逆の不斷の翻譯によつて解説を混亂させないで、一般語〔obščij jazyk〕を發見しそして日本語舊歐文法と現代のものとの間の連結を配置するを許容するからなのである。

對應文語形の外に B. H. Chamberlain が確實現在又は未來時〔certain present or future tense〕と呼ぶ對應口語形をも、私は簡潔の故を以て此術語もて標記する事にしよう。⁽⁸⁾

第四節 「現在時終結・限定形」なる術語〔三頁〕

現在時終結及び限定形を私は「現在時終結・限定形」〔zakijučitel'no-opredelitel'naja forma nastojščego vremeni〕

なる術語に統一する事にするが、何とならば第一【後出】活用動詞に於けると同様に、第四【後出】活用動詞に於ても是等の形は同一であつて、例へば第一活用の *Aiku* 「聞く」は此動詞の現在時終結形にも限定形にもなるし、同様に例へば第四活用の *miru* 「見る」も亦同時に現在時終結形にも限定形にもなるしからである。其等の中の論題に依從して第一及び第四活用現在時終結・限定形なる一術語もて表現する此現在時終結及び限定形同一性は、是が爲に全く便利な譯なのである。

現在時終結及び限定形なる術語は解示する迄も無いと考へる。

第五節 語尾、接尾辭、語基なる術語【三一四頁】

語尾〔*otamēnie*〕は命題に於ける動詞の場所を指示する動詞の形式附屬物と、接尾辭〔*suffixes*〕は語基と語尾との間に存する形式附屬物と、語基附屬物又は(單一)語基〔*osnova*〕は語の實體意義の具有物である語部そして語から形式附屬物、即ち語尾、接尾辭、又は接尾辭が幾箇かあるならば是を差引いて残る語部と、派生語基は一箇の接尾辭によつて擴張された語基と、第二派生語基は二箇の接尾辭によつて擴張された語基と云ふ風に私は解する。「複合語基」〔*sklōnaja osnova*〕なる術語を私は派生語基の全階段を統一する爲に使用する事にする。

日本語歐文法に於て與へられてある狹義の「語基」なる術語は、一般語維持の目的を以て所謂否定及び條件語基に就て語る場合を除いては、使用するのを避ける事にする。

第六節 否定語基及び條件語基なる術語を除き度い希望【四頁】

言語學的觀點からは所謂否定語基〔*otricatel'naja osnova*〕〔negative base 未然形に當る〕及び所謂條件語基〔*slovnaja osnova*〕〔*conditional base* 已然形に當る〕なるものは派生的であるが故に、其等は對應する言語學的術語を以て代用しなければなるまい。第一活用動詞否定語基の代りに「*た*」に終る派生語基なる術語を、同上第一活用動詞條件語基の代りに「*え*」に終る派生語基なる術語を導入し得るであらうと思ふが、何とならば前者は接尾辭「*え*」の添加によつて單一語基から形成されるし、後者は接尾辭「*え*」の添加によつて同上語基から形成されるからなのである。

殘餘全三活用の否定語基に關しては、他術語を以て取替へないでも、此術語は一般に廢棄され得よう、何とならば本質上是は所謂不定形〔*neopredelennaja forma*〕〔*indefinite form* 連用形に相當する〕と如何しても區別付けられないからである。是等三活用（第二、第三及び第四）に於ける「條件語基」なる術語は「*え*」に終る第二派生語基なる術語もて取替へ得られよう、何とならば接尾辭「*え*」は單一語基へではなく、派生、特に第一派生語基へ添加されるからである。

第七節 Chamberlain 式活用組織の採用【四頁】

今一箇註解。所謂現在時語尾に就ての問題なるものは、其々の活用組織を離れて吟味する事は全く不可能であり、

是が爲何か或組織を採用する必要がある故に、私は文語に於ては動詞活用 Chamberlain 式組織に停滯するのであつて、私は當分此組織を他組織よりも愛好するのであるが、何とならば此組織に於ては様々の形態構造の動詞が他組織に於けるよりも紛糾する事が少いからである。少し下方に掲げられる考察によつて私は四文語活用 Chamberlain 式組織を口語にも擴張する。是が爲に當時、幾分は他の根據によつてゐるが、E. G. Spalvin 教授も意見を出されて居つて、彼は併しながら矢張り三口語活用組織に執着したのである。⁽⁹⁾

第八節 寫音法【四頁】

終に最後の註解。本論に於て私は E. G. Spalvin 教授に工夫され極東國立大學(DCU)東洋學部に採用された寫音法【此露文字も譯者は勿論前述歐大陸式羅馬字に書改めるのである】を墨守する事にするが、一箇の大ならざる除外例があつて、即ち凡ての也行音化されたる〔*otovannyj*〕母音【スラヴ文法で所謂「軟母音」】は獨り音聲質〔*fonema*〕に限らず、私は音聲質〔*fonema*〕の代用物〕プラス對應母音音聲質もて標記する。

註 1 E. G. Spalvin 教授の見解の幾分は彼の著作によつて知れる事が出来る。《*Krattij obzor imenjaemyx častej reči japonskogo knižnogo jazyka. Posobie k lekcijam po grammatike japonskogo knižnogo jazyka, čitanym v Vostočnom Institute*》。

Vypusk I-j (str. 1—152), str. 16—17. Vladivostok. 1913 【『日本文語變化品詞要覽 東方學院講讀日本文語文法講義參考書』第一部(一一—一五二頁)、一六一—一七頁、ウラヂウオストク、一九一三年】。

- 2 G. B. Sansom. An Historical Grammar of Japanese. pp. [str.] 131, 173 [—] 174, 180—181 etc. [3 dir.] Oxford at the Clarendon Press. 1928 参照。【5m】。
- 3 直前集 采《Kratkij obzor》, str. 16—17 参照。
- 4 G. B. Sansom. Op. cit. 【前掲書】 p. 131 参照。
- 5 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Written Language, third edition, p. 84. London, Yokohama. 1904 【初版 1872 再版本 p. 92】参照。
- 6 B. H. Chamberlain. A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style), p. 67. London. 1886 【増訂本 p. 79】参照。【以上三頁】
- 7 M. Bréal [Bréal] 【ブリアル】は現在時範疇に關連して次の様に言つて居る。「吾人が現在【*présent*】と呼ぶのは、*ヘー*は已里を貫流する。——地球は太陽を廻る。——惡錢身に付かず。と云ふ時の如く、時稱の全標記の缺乏なのである」。
- 8 M. Bréal. Essai de Sémanitique, 5-ème éd., p. [p.] 339 [—40]. Paris. 1921 【初版 1877】
- 反對觀點の擁護者は A. M. Peškovskij 【ペシコフスキヤ】に於る。Russkij sintaksis v naučnom osvetečenii, 3-e soveršennoe pereizdanie izdanie, str. 239—240. GIZ. Moskva—Leningrad. 1926 【科學照明に於ける露語文章論、全改訂第三版、二三九—二四〇頁、國立出版局、モスクワ——レニングラート、一九二八年】参照。
- 8 B. H. Chamberlain. A Handbook of Colloquial Japanese, fourth edition, revised, p. 165. London, Yokohama. 1907 【初版 1888】参照。【以上三頁】
- 9 Op. cit. pp. 19—20 参照。【以上四頁】

第二章 日本語現代歐文法に従ふ現在時語尾 【五一—二頁】

第一節 Chamberlain, Aston, Weitz, Rose-Innes, Mac-Govern 及び Sansom による

現在時語尾【五一—七頁】

Chamberlain 式活用分類組織を採用して必要の時には其へ私が他組織を翻譯する事として、現在時語尾問題が日本語現代歐文法によつて如何に解決されるかと云ふ解説を、B. H. Chamberlain の見解の吟味から始めなければならないのであつて、況や彼は W. G. Aston と竝んで日本人自身へさへも日本語研究に大影響を示した日本語文法英國派創始者の一人であるのである。

B. H. Chamberlain に従へば、文語に於ては第一活用動詞現在時語尾は終結形に對すると同様に限定形に對しても

形態質・*-u*であり (*juku* < *juk+u*)、第二及び第三活用動詞語尾は終結形に對しては形態質・*-u* (*houu* [xouu] < *hou* + *u*, *sugu* < *sug+u*)、そして限定形に對しては形態質・*-uru* であり、(*houuru* < *hou+uru*, *suguru* < *sug+uru*)、第四活用動詞同上時稱語尾は兩形に對して形態質・*-ru* である (*miru* < *mi+ru*)。③

口語に於ては第一活用動詞では形態質・*-i* が現在又は未來時語尾であり、第二活用動詞では形態質・*-eru* が同上物であり、第三活用動詞では形態質・*-inu* である。④ 文語に於て第四活用によつて活用する動詞は口語に於ては第三活用によつて活用するが故に、(4) 口語に於ては現在又は未來時に於ける其等の語尾は・*-u* でなく・*-inu* であると云ふ事が示されてゐる。かくて例へば動詞 *miru* 「見る、視る」は或場合には語基 *mi-* と現在時語尾・*-ru* とを有するが、他の場合には語基・*-i* と語尾・*-inu* とを有する。同一動詞が同一時に様々の形態組成を有する事は出来ないから、文語に於て第四活用に屬する動詞を第三口語活用へ關せしめるのは形態不合理となるのは明確であるが、此不合理は文語に對して採用された四活用に口語にも擴張するならば容易に除かれるのである。

凡て是等現在時語尾は一目瞭然たらしめる爲には下の小表の體裁で表示する事が出来る。

終 語 形 限 定 形
文 語

一 活	-u	-u	(口語では -u)。
二 活	-u	-uru	(口語では -eru)。
三 活	-u	-uru	(口語では -iru)。

四 活

-u

-ru

W. G. Aston 在「一八七二年」⁽¹⁾、即ち B. H. Chamberlain よりも著しく以前に於て、文語文法を發兌したが、B. H. Chamberlain が第二及び第三の二活用に分割した動詞を第二活用に統一して、文語には三活用のみを採用してゐる。⁽²⁾ B. H. Chamberlain では第二及び第三口語活用中に存する動詞を凡て一箇の第二活用に合一して、口語に於ては凡てを二活用に差別してゐるのである。⁽³⁾ 文語文法に於ては彼は現在時語尾の組織的解説を與へてゐないが、第二活用動詞限定形語尾 -*uru* と動詞 *uru* 「得る」との同一性に關する註解から、⁽⁴⁾ 口語第一及び第二活用動詞語尾小表からも亦⁽⁵⁾ B. H. Chamberlain と同様な語尾を採用してゐると云ふ事になるのである。

Weintz [Vajntc] 【*v^{ye}*】は口語に於て三活用を採用して、-*u*、-*uru* 及び -*iru* を現在時語尾と見做してゐる。⁽⁶⁾

Rose-Times [Roz-] 【*ro^{sy} i^z*】も亦口語に於ては Chamberlain 式活用分類を採用してゐるが、特に現在時語尾には停滯してゐない。⁽⁷⁾

MacGovern [Mak-] 【*ma^{ga} a^s*】は、異なる場所を比較して解る様に、語尾 -*u*、-*eru* 及び -*iru* を採用してゐるが、⁽⁸⁾ 豫告が附いてゐる。「凡ての母音動詞は *u*、又はもつと正確に言へば、*iru* 又は *eru* に終る。*iru* は接尾辭となるに過ぎないから、語基は *u* 又は *o* を有してゐるのであつて、例へば *miru* は *mi^o tuberu* は *tube* 等となるが如くである」と彼は書いてゐる。⁽⁹⁾

G. B. Sanson は最近發行した『日本語歴史文法』に於ては現在時又は其に對應するものゝ語尾問題の組織的解説を與へてゐない。彼の見解は、彼が日本語の音節的字母に不可分離に連結してゐる日本語動詞組織の強い影響下に居る

が故に、判斷するのに頗る困難である。彼が日本の名稱なる四段〔tetraxjadnoe〕〔quadrigade〕(第一)二段〔dvuxjadnoe〕〔bigrade〕(第二及び第三)及び一段〔odnojadnoe〕〔unigrade〕(第四)を付與する四正格活用に就て語てゐるのは、⁽¹³⁾動詞形語尾及び特に現在時形に對する日本式機械的觀點の採用と云ふ事に當然至つて了ふのである。が機械的日本式組織は絶対に科學的でないのであり、動詞形態組成を完全に歪めてゐるが故に、其組織の採用が何處へ誘ひ得るかを想像するのは困難でない。彼は「音節」¹⁴を動詞限定形語尾と見做してゐると云ふ事が、其箇々の註解から解るのであつて、⁽¹⁴⁾是は Chamberlain 式術語用法へ翻譯すれば、第二及び第三活用動詞現在時限定形語尾は音聲質 ¹⁵ であると云ふ事を意味する。殘餘形語尾であるものは、單に推察するだけとしなければならない。不完了形〔imperfect form 未然形に當る〕又は所謂否定語基は ¹⁶ に終ると云ふ、⁽¹⁶⁾第二及び第三活用間の差異は、語尾差異 ¹⁷ 及び ¹⁸ に歸すると云ふ⁽¹⁷⁾彼の註解や、第二活用語尾の「得る」⁽¹⁸⁾と第三活用動詞語尾の「居る」⁽¹⁹⁾〔(e)iv〕説〔teorija «byť»〕〔(e)iv〕⁽²⁰⁾との彼の採用は、凡て是は何れも、B. H. Chamberlain が爲すのと同様、彼が最後には所謂現在時語尾を吟味しなければならまいと云ふ事を意味する。是は果して左様であるのか、又は日本式機械的活用組織の採用に結び付けられる見解を彼が墨守するのかと云ふ事を、正確に説示する事は出来ないのである。

第二節 Lange, Plaut, Meissner 及び Balet による現在時語尾〔七—八頁〕

獨逸の日本學者〔Japanolog〕P. Lange 【リ・ゲ】の見解に就ては次の章句によつて判斷する事が出来る。「*albe-ri*

「食べる」*miru*「見る」の如く *eru* 又は *iru* に終る動詞の現在時形から語基【英獨文原書では *stem, Stamm*】を得るには *ru* を除け。 *kan*「買ふ」類の第二種動詞では *n* の代りに *i* を置け、*kai*。(6)

H. [G.] Piant【ラント】は曰く「第一種に於ては單一語根【*koren*】(獨英文本では *Stamm, stem*) は *e* 又は *i* に終り、其は現在時語尾 *ru* を除けば得られる……第二種動詞に於ては單一語根は現在時語尾 *n* の省略によつて得られる」。(6) 従つて口語に於ては現在時に對して第一 Chamberlain 式活用動詞に於て語尾 *n* がそして第二及び第三 Chamberlain 式口語活用に於て語尾 *ru* が採用されてあるのである。

一九二七年に獨逸語で發行した日本文語文法教科書の著者 H. Meisner【マイスネル】は、九活用日本式組織と彼が必ずしも常にではないが獨逸語に翻譯さへした日本文法術語用法とを採用して、第一活用動詞現在時終結及び限定形語尾は *n* (*mac+n*) 第二及び第三活用動詞同上時稱終結形語尾は *n* (*nag+n, ok+n*)、同上動詞限定形は終結形へ補足された *ru* (*nag+ru, ok+ru*) であると見做してゐる。口語に於ける同上活用現在時に對しては *n*、*aru*、*iru* 及び *iru, ru* を採用してゐるのである。第四活用動詞現在時語尾に關しては、彼は形態質 *n* を其と見做さなければならぬ様である。(6)

佛蘭西の日本學者 Balet【バレ】は *ru, iru* 及び *eru* を現在時語尾と見做してゐるのである。(6) (彼に於ては最後の二活用の順序が置換へられてゐる)。

第三節 Smirnov, Spalvin 及び Pozdneev による現在時語尾【八一九頁】

さて露西亞の日本語學者 (Japonist) 達に轉すると、一八九〇年に出版した日本語指南の著者 D. Smirnov 【スミロフ】が露西亞の日本語者達の大部分の様に英國派踏襲者として、*~u* を第一活用動詞現在時語尾と、*-eru*, *-ru* を第二活用ものと、そして *-iru*, *-nu* を第三活用のもとと見做し、同時に稍々意外にも、受身・可能相形成に就て語る時、凡ての正格動詞現在時語尾は *~u* だけであると陳べてゐるのを、吾人は發見するのである。

D. Smirnov が同一活用動詞に對して現在時語尾若干を實際與へてゐるのは、次の引用句から解る。現在時に對する語基形語尾一覽表に於て彼は 語 尾 を與へてゐるのである。

一口活 二口活 三口活

「直接法現在

u *eru* *iru*」^p

が少し下方に彼は書いてゐる。「第二活用には其語根と否定語基とが同一であつて *~u* に終る全動詞が關係するのであり、其等は語根へ 語 尾 *~u* の附加を通じて直接法現在を、語根へ *~u* の附加を通じて條件語基を形成するのである」。「第三活用には其語根と否定語基とが同一であつて *~u* に終る動詞が關係するのであり、其等は語根へ 語 尾 *~u* の添加を通じて直接法現在を、語根へ *~u* の添加を通じて條件語基を形成するのである」。

「文語とそして日本の中央及び西部諸縣の方言とに於ては第二及び第三活用動詞は肯定直接法現在では 語 尾 *~u* 及び *iru* の代りに *uru* を有する」……

「全活用動詞の受身相は直接法現在時 語 尾 *~u* を *ureu* に變更して形成される (私案配列 Nikolaj Macokin

[trazivka moja. N. M.)²]

E. G. Spalvin 教授は B. if. Chamberlain の現在時限定形に對應する文語肯定限定確實敘述形語尾として第一活用動詞には *~* (|| 口語では *~*)、第二活用には *-nu* (|| 口語では *-nu*)、そして第三活用には *-nu* (|| 口語では *-nu*) を認識してゐる。⁽²⁴⁾ 「文語第四活用へは *~* に終る單音節語根を有する二音節動詞のみが關係すると云ふ事を吾人は確固たる標識とする」⁽²⁵⁾ と云ふ彼の註解から、第四活用語尾は音聲質 *~* であると云ふ結果になるのである。少し上方に爲された彼の他の註解、特に「語尾 *~* に先行する *~* 又は *~* は(私案配列 N. M.) 全語基に於て維持され、かくて活用に對して特徴的な *~* 又は *~* を有する母音活用なる特徴を第二活用へ附加する」⁽²⁶⁾ と云ふ事から、彼は第二活用動詞に對しては、語尾 *-nu*, *-nu* の外に、語尾 *~* をも採用するのであると云ふ事が解る。第三活用動詞に就て類推的考察をすれば、*-nu*, *-nu* の外に、語尾 *~* の採用へも亦導かなければならない。

J. Pozdneev 【*Д. Позднеев*】教授は口語に於て W. Aston のと同様な動詞分配を有する二活用を採用して、*-is*, *-enu*, *~* 及び *-nu*, *~* を現在時語尾と見做してゐる。⁽²⁷⁾

「第二活用には、稀な例外は除くとして、*-nu* 及び *-nu* に終る殆ど全動詞が屬する」と D. Pozdneev は言つてゐる。「確定 [polozitel'naja] 語基に於ける語尾 *~* が不定語基に於て消滅するならば、動詞は第二活用となる、*kinu* — 「着る」⁽²⁸⁾。彼は同一動詞形式を確定語基及び直接法現在時と呼んでゐるのである。

第四節 第二、第三及び第四活用動詞現在時語尾問題に於ける歐文法の異説と矛盾【九一—一〇頁】

上説全部から、所謂現在時語尾問題に於ては歐文法の著者達の間では充分な同意と云ふものが注目されないと云ふ事が解る。彼等は形態質々を第一文口語活用動詞現在時語尾と誤認すると云ふ事に於てのみ合致する。第一活用の限界に對しては異なる著者達に於ける異説のみならず、同一著者達に於ける不鞏固や不確定が生するのである。

Chamberlain と Aston とによれば第二及び第三文語活用現在時限定形語尾は *-ru* Meissner と Sanson とによれば *-ru* Spalvin とによれば *-ru* と *-ru* とである。【原著補註第二 第二活用動詞では動詞「得」々と同一視されるが第三活用動詞では此動詞と同一とは見做されない形態質々は、第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾と普通誤認されると云ふ事に於ても亦、或同意が觀られる。】

Chamberlain, Aston, Balet 及び Weiniz とによれば第二及び第三口語活用現在時語尾は *-ru* と *-ru* Lange と Plaut とによれば *-ru* である。

Mac-Govern, Meissner, Spalvin 及び Pozdneev とによれば、同上口語活用現在時語尾は *-ru* と *-ru* *-ru* と *-ru* Smirnov とによれば全活用に對して *-ru*, *-ru*, *-ru*, *-ru* とである。更に、文語に於て四活用として口語に於て三活用又は文語に於て三活用として口語に於て二活用なる組織の採用によつて、同一著者達に於ては例へば Chamberlain, Aston 及び Spalvin に於ては、同一動詞は二箇の語尾を有してゐて、かくて例へば動詞 *miru* は或場合には *miru* から、他の場合には *miru* から成立すると云ふ事が示されてゐる。

Meissner にあつては文語に於ては第二及び第三活用動詞は凡て限定形では語尾 *-ru* を、口語に於ては *-ru* (第二

活用)及び -en (第三活用)の外に、 -eru 及び -ru をも亦有してゐるのである。

第五節 是等異説と矛盾との蓋然的原因(一〇—一頁)

様々の著者達に於ける此異説なるものは、彼等の或者は語尾音聲質 ru , eru を動詞 ru , eru 「得る」と同一視するが、他の者は終結形を動詞語基と誤認し、其へ語尾 -en を補足して限定形を得るのであり、又は不定形を語基と見做して、其へ語尾 -en を添加して文語限定形の對應形を得るとする事から幾分説明される。

「得る」説は壓倒的大多數の場合に於て閉語基【子音で終る語基】プラス語尾 -ru , -eru なる動詞分解へ導くのであるが、終結及び不定形を語基へ適合さす事は閉語基【母音で終る語基】プラス語尾 -en なる同上動詞分解に至る譯なのである。

第三活用動詞に於ける語尾 -ru , -eru 及び -ru の方は、或著者達にあつては -ru なる分離に於て動詞(ru)「居る」との同一視が演ぜられはするけれども、第二活用動詞の類推によつて得られるのである様に見える。

文語に於ては -ru と -ru をして口語に於ては -eru と -ru との二箇の異なる語尾を同一動詞に對して同一著者達が如何にして認容するかと云ふ事を闡明するのは幾分もつと困難なのである。是に於ては -ru , -eru と動詞 ru , eru 「得る」の同一視が責任があるのだと云ふ事があり得る。後者の限定形は終結形 -en プラス限定形語尾 -ru から成立すると見做される様に思はれる。かくて多分、語尾 -ru , -eru が其概念方面から、即ち限定形を取つた動詞 ru , eru

「得る」との其同一性の方面から吟味される時は、凡て *-uru*, *-eru* は限定形語尾と誤認されるが、*uru* は *uru* の類推によつて専ら形式方面から吟味される時は、*u* が語尾と誤認され、其は考へ得られる如く、動詞「得」の限定形語尾であるのである。

極簡單に言ふと、異れる著者達に於ける是等異説及び同一著者達に於ける二重性は次の様に説明し得られる。現在時限定形、例へば *taburu*—*taeru* 等の動詞相互間の比較に際しては *-uru* が分離され、現在時口語形、例へば *taberu*—*taeru* の比較に際しては *-ru* が分離されるが、現在時終結及び限定形、例へば *tabu*—*taburu*, *taie*—*taeru* の比較に際してと等しく、語尾 *-u* が分離される。同様に第三活用動詞語尾 *-uru*, *-iru* 及び *-ru* も亦分離されるのである。

是等異説と二重性との殆ど蓋然的原因なるものは、現代文法其物が現在時形と呼ばれるものゝ語尾を配置するのであると云ふ推測から出發するならば、斯かる次第なのである。Aston も Chamberlain も他の著者達も自身の先驅者を引證する習慣を有せざるが故に、其々上掲考察から出發して彼等が是等の語尾其物を發見する事は勿論認容し得る。彼等が普通に獨斷的規則は與へるが、文法形式の形態分析は行はないのであるから、是等の考察が實際に如何なるものであるかを各所與の場合に於て語るのは随分困難なのである。

歴史的には是等異説と二重性とは、下示（第五章第十六節參照）の如く、現代歐文法によつて與へられてある現在時形態論が Rodriguez [Rodriguez] 【ロドリゲス】 Curtius [Kurtius] 【クァウ】及び Hoffmann [Hoffmann] 【ホフマツ】文法へ迄遡ると云ふ結果となるのである。

第六節 其等の歸結【一一頁】

併しながら、たとへ是等凡ての矛盾を如何に説明した所で、同一實體意義が連結される閉と開との二箇の異なる語基と、現在時限定機能なる同一形式意義が編入される二箇の異なる語尾とに、同一動詞が分解されると云ふ事に至つて了ふのである。同一時に於ては同一動詞は同一實體意義を有する二箇の異なる語基と同一形式意義を有する二箇の異なる語尾とを有する事は出来ない(例へば動詞 *uberru* は同一時に於ては語基 *ub-* と *ubbe-* 及び語尾 *-eru* と *-ru* とを有する事は出来ない)から、此處に於て何處かで誤謬が爲される事は明確なのである(第五章第十六節參照)。

註

- 1 福井久藏・日本文法史・東京市明治書院・明治四十三年四版發行【以上原著通り、以下露文字寫音及び露譯省略。初版明治四十年】二二—二三頁【昭和九年増訂本同頁邊】。
- 2 B. H. Chamberlain. A Simplified Grammar, pp. 49—63 【増訂本 44—74邊】參照。
- 3 同人『《A Handbook of Colloquial Japanese》』p. 165.
- 4 同人『《Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language》』p. 145 (Published by the Asiatic Society of Japan as a Supplement to Vol. XXIII of its Transactions), Yokohama. Kelly and Walsli. 1895 參照。
- 5 【以上五頁】
- 5 Op. cit., p. 81 參照。
- 6 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Spoken Language, fourth edition, p. 42. Yokohama. 1888 【初版 1871】。
- 7 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Written Language, p. 90 【増訂本 p. 99】。
- 8 W. G. Aston. A Grammar of the Japanese Spoken Language, p. 42.

- 6 H. J. Weintz. Hossfeld's Japanese Grammar, p. 54. Philadelphia. 1914【頁廿 1904 初版・1919 再版】。
- 9 A. Rose-Innes. Conversational Japanese for beginners. Part II. Elementary Grammar of the Japanese [Spoken] Language. New edition, p. 12. Yokohama. 1919【再版】。
- 11 W. M. Mc Govern, PH. D. Colloquial Japanese, pp. 20—21. London. 1920【頁廿 pp.21—22 の 21。露語本は第一種 [pervyi koncentr] str. 49—50】。
- 12 同上 p. 20【頁廿 p. 21。露語本第一種 str. 49—50】 【頁十六頁】
- 13 Op. cit., p. 151.
- 14 同上。
- 15 Op. cit., pp. 151, 152.
- 16 Op. cit., p. 154.
- 17 Op. cit., p. 160 etc.
- 18 Op. cit., p. 154.
- 19 Dr. R. Lange. A Text-Book of Colloquial Japanese. English edition by Christopher Noss, p. 142. Tokyo. 1903【露文本 pp. 162—3】。
- 20 G. Plaut. Grammatika Japonskogo Kazgovornogo Jazyka, str. 12. Spb. 1910【日本口語文法・聖彼得堡・Vladimir Isakovic 露譯。獨英文本 p. 11】 【頁十七頁】
- 21 【原著補註第一 私が P. Lange 教科書英文版と H. Plaut 教科書露文版とを使用するのは、元々 P. Lange 獨文原書と H. Plaut 英露の和の自由にならなかつたのである】。
- 22 K. Meissner. Lehrbuch der Grammatik der Japanischen Schriftsprache, pp. 6—7 & 17. Deutsche Gesellschaft für Natur- u. Völkerkunde Ostasiens. Tokyo. 1927.
- 23 Balet. Grammaire Japonaise. Langue parlée. 3-ième édition, p. 126. Yokohama. 1908【1899 初版】 【頁十八頁】
- 24 D. Smirnov. Rukovodstvo k izučeniju japonskogo jazyka【日本語研究指導】 str. 23—24, 72, 118. Spb. 1890.
- 25 Op. cit., str. 20—21.

- 25 同上, str. 21.
- 26 同上, str. 21.
- 27 D. M. Pozdnev. Grammatika razgovornogo japonskogo jazyka. Konspekt lekcij, čitannyx v Voennoj Akademii RKKA i v Institute Vostokovedenija v 1922/23 učebnom godu, str. 82, 95, 97. Moskva. 1923 年【日本口語文法 一九二二—二三年度勞農赤軍陸軍大學及東洋學會講讀講義概要, 八二・九五・九七頁, 莫斯科, 一九二三年】。
- 28 同上, 同頁。【以上九頁】

第三章 第二活用動詞現在時語尾「得る」説と若干の

批判的註解【二二—二二頁】

第一節 Aston の解説に於ける第二活用動詞現在時語尾「得る」説【二二—二三頁】

さて吾人は日本語現代歐文法の開祖達なる Aston と Chamberlain とによつて第二活用動詞現在時語尾「得る」説が如何に解説されてあるかを見る事にするが、是と共に此説が凡て上示の矛盾に少からず責任があると云ふ事が益々知られる結果となるのである。

第二活用動詞語尾と動詞 *u*, *uru* 「得る」の對應形との同一性に對する Aston の見解を吾人は活用に就ての次の註釋中に發見する。

「日本語動詞三活用中では第一活用が明確に本源的である」。

「第三活用は専ら單音節語根【英文原書も root】動詞から成立してゐる。是等動詞はたとへ第一活用によつて變化するとしても、副詞形【adverbial form 連。用。形に當る】以外は動詞の全部分に於て母音語根は廢滅したのであらうが、其喪失なるものは二文字【*hukari*】【英文原書の letter が勿論舊式言語學的術語用法なのである】よりのみなる語に於ては認容されるのが困難であらう。是を避ける爲に文字、が語根と限定、終結及び完了形【perfect form 已然形に當る】の特徵的母音語尾との間に挿入されたのであつて、かくて吾人は例へば *uru, uru, me* の代りに *miru, miru, mire* を有するのである。否定語基に於ては母音語根の廢滅は他の手段によつて避けられ、即ち語根が變更なしに留る様に認容されたのである」。

「其變化は疑も無く幾分は同上原因によつて或程度迄（江戸の口語に於ては同一であるが）第三活用動詞變化に類似する單音節語根を有する他の動詞が若干存する。是等動詞の一つは *uru* 「得る」であつて、是は、副詞形は *u*、終結形は *u*、限定形は *uru*、否定語基は *u*、完了形は *miru* の様に活用するのである。*uru* は實際は第三活用の少し變格な動詞として吟味され得るのである。語尾一覽表【Table of Inflections】へ轉すると、主要部 *uru* は第二活用の *u* に終る動詞語尾と同一である事が解り、全類似動詞は此動詞 *uru* が續く語根から成立すると云ふ結論を爲す充分な根據が得られる。是は此活用動詞の大部分を構成する受身及び使役動詞への關係によつて明かに生ずるのである。*Korosuru* 「殺るる」は明確に *korosu-ari-uru* 即ち「殺す—在り—得る」に外ならない、*korosuru* 「殺する」は *korosi-si-uru* 即ち「殺し—爲—得る」である。例へば *abukuru* 「預くる」（實際は *to get taken charge of*), *miruru*

「見る」類の他動詞及び自動詞が同要素を保有してゐる事は容易に明示し得るのであつて、此活用のゝに終る殘餘動詞の分析が一般に是を顯してゐる」。

「其語根がゝに終る動詞の數は比較的に小さいのであつて、其等の多くは亦第一活用によつて變化する事も出来る。其等は明かに亦派生動詞でもあるが、併し語尾 *nu* は動詞 *nu* 「得る」であるか、又は例へば *nu* 「居る」の様な單音節語根を有する何か他の動詞であるかは、或は疑ひ得る様である」。(1)

第二節 Aston の見解に關する批判的註解【一三四頁】

吾人が今 Aston の引證する語尾一覽表へ轉じて、其中の前掲第二活用動詞を動詞「得る」と比較するならば、次の小表を得るのである。

	「得る」	「食ぶる」
副詞形	(Chamberlain によれば不定形) <i>e</i>	<i>labe</i>
終結形	 <i>n</i>	<i>labu</i>
限定形	 <i>nu</i>	<i>laburu</i>
否定語基	 <i>e</i>	<i>labe</i>
完了語基	(Chamberlain によれば條件語基) <i>nu</i>	<i>labure</i>

此小表は動詞「得る」の前掲形が動詞 *labern* 「食べる」の非派生語基 *lab-* に続く部分と音聲的に同一、即ち $e \equiv -e, n \equiv -n, nru \equiv -nru, e \equiv -e, nre \equiv -nre$ である事を明示してゐる。さて、此音聲同一性を根據として *Aston* は動詞 *nru* 「得る」の對應形を有する語基 *lab-* に続く全形態同一性に就て結論を爲すのである。動詞 *labern* の前掲形語尾(又は語尾と誤認されるもの)が動詞 *nru* 「得る」の對應形と同一であると云ふ事の如何なる形態論證をも、又は換言すれば、此動詞の文法用法〔*grammatikaiszacija*〕の如何なる形態論證をも彼は掲げて居ないのである。同上動詞 *nru* 「得る」の同上形と第二活用の其他の受身、使役、自動及び他動の全動詞對應形語尾との同一性に就て語る時も亦、同様彼は何等の形態論證をも與へてゐない。例へば *korosari-nru* 「殺さるる」は明確に通り、形態矛盾以外何物へも導かないのである。

「他動詞及び自動詞が……同要素を保有してゐる事は容易に明示し得るのであつて、此活用のゝに終る殘餘動詞の分析が一般に是を暴露してゐるのである」と云ふ類に於ける其他の斷言も亦斯かる無根據な特徴を有してゐる。

Aston は「主要部 *nru* は第二活用のゝに終る動詞語尾と同一である」と斷言してゐる。

是は、彼に於ては不定形に外ならないものである「語根」から出た第二活用動詞派生物に就て彼が語る所に基いて推測し得るであらう如く、例へば動詞「食べる」の一覽表に於ける上掲の不定形即ち *labe* は、 $\wedge labe$ (即ち其自身) + e からでなく、 $\wedge lab + e$ から形成されたのであると云ふ事を意味する。*labe* に於けるゝと不定形に於ける動詞の「得」との同一性は、特に不定形 *labe* の説明に對しては認容せられる。此故に動詞不定形「得」が添加されて不定形

tabe が形成される様な何か他の * *tabe* を推測する事は出来ないのである。 *tabe* が $\langle$ * *tabe* + *e* からでなく $\langle$ *tab* + *e* から形成されるならば、例へば *taberu* は $\langle$ * *tabe* + *eru* からでなく $\langle$ *tab* + *eru* から形成されなければならないのであつて、まして斯かる二重の「得取」〔*polučenie*〕（食 + 得 + 得る〔*est* + *polučenie* + *poiúcat*〕）は全く何物をも與へないのであるし、*taburu* も亦 $\langle$ * *tabe* + *uru* からでなく $\langle$ *tab* + *uru* から形成されなければならない。

tabe が $\langle$ *tab* + *e* から形成されるならば、例へば不定形 *korosare* は $\langle$ *korosar* + *e* から形成されなければならないが、*korosare* が $\langle$ *korosar* + *e* から形成されるならば、*korosaru* は $\langle$ *korosar* + *eru* から、*korosuru* は $\langle$ *korosar* + *uru* から形成されなければならない。同様に動詞 *korosu* 「殺す」の使役相 *korosuru* は $\langle$ *korosus* + *uru* から成立しなければならない。

第二活用動詞語尾「得る」説の順次的適用を基としての是等二動詞の形態構成は、正確に言へば、斯かるものでなければならないのである。

所が *Aston* は *korosuru* 「殺める」は明確に *korosu-ri-uru* に外ならないし、*korosuru* 「殺める」は *korosi-si-uru* であると陳へてゐる。

かくて「全類似動詞（即ち第二活用全動詞 *N. M.*）は此動詞 *uru* が後へ續く語根から構成される」と云ふ *Aston* の斷言は、若しも彼が爲す様に、語根を動詞の不定、又は彼の術語用法によつて、副詞形と解するならば、眞實でないと云ふ事が示されるのであり、そして由々しき形態矛盾に至るのである。

第三節 「得る」説と動詞「得る」形態論(一四—六頁)

で第二活用動詞語尾「得る」説なるものは、動詞「得る」自身の形を説明せずに残してゐるのであると云ふ事を指示しない譯に行かない。動詞「得る」の現在時終結形 $\sim$ には此時稱の終結機能の形式意義のみならず、動詞の實體意義も亦連結するが故に、 $\sim$ は動詞「得る」の現在時終結形のみならず、其單一又は非派生語基でもあると云ふ事を意味するのである。併し $\sim$ が其非派生語基、即ち其實體意義の唯一的擔當物であるとする、其限定形の形態は如何なるものであるか。

此限定形 $\sim$ と同上動詞の所謂條件語基 $\sim$ とを比較して、吾人は共通部 $\sim$ を、そして其外に、限定形に於ては語尾 $\sim$ を、條件語基に於ては接尾辭 $\sim$ を顯す。若しも $\sim$ が動詞の實體意義が特に連結もされてある非派生語基であるとする、限定形 $\sim$ 及び所謂條件語基 $\sim$ に於て發見される此共通部 $\sim$ は、動詞の實體意義の擔當物である非派生語基 $\sim$ と、そして、或形態質又は今迄の所我々には其意義不明の接尾辭 $\sim$ との、二部分に分裂してつづ。が是は、此共通部 $\sim$ は單一ではなく派生の語基であると云ふ事、そして實體意義は $\sim$ 全部ではなく $\sim$ に於てのみ求める必要があると云ふ事を意味するのである。

かくて動詞「得る」の現在時限定形及び其條件語基は複合形態組成を有すると云ふ事、前者は單一語基 $\sim$ 、不明の接尾辭 $\sim$ 、そして現在時語尾 $\sim$ から、後者は同上語基 $\sim$ 、同上接尾辭 $\sim$ 、そして條件語基 $\sim$ の接尾辭から成立すると云ふ事が解る。

同様な複合組成をば現在時口語形も、此動詞の口語條件語基も有してゐるのであつて、即ち *eru* 及び *ere*。

eru と *eru'*、*ere* と *ere'* 間の差異なるものは、*eru* と *ere* とに於ては、*eru*、*ere* に於けるが如き *u*、*e* が動詞の實體意義の連結されてある單一語基であると云ふ事に歸するのである。*eru* と *ere* とを互に比較して、吾人は或共通部 *u*、*e* を分離する。其を同時に動詞の實體意義の擔當物即ち其語基である所謂不定形に比較して、吾人は同じく *u*、*e* に於て此單一語基 *u*、*e* を分離するのである。殘餘形態部は *ru* と *re* とに於けるものと同様である。

凡て是は、動詞「得る」の現在時限定形 *uru* と其對應口語形 *eru* とが、文語形 *ure* と口語形 *ere* との所謂條件語基も亦、「得る」説によつて完全に無視される其特別形態を有してゐる事、其等は其一つが其不明の大きさを表示する其自身の特別形式附屬物を有してゐる事に就て、語つてゐるのである。

此故に第二活用動詞の現在時限定形と條件語基とを同上形に於ける動詞「得る」の添加に由つて説明する事は、或不明のものを他の不明のものに由つて説明する事を意味する。第二活用動詞の不定形語尾 *u*、*e* 及び現在時終結形語尾 *u*、*e* と同一視される動詞「得る」の不定形 *u*、*e* 及び現在時終結形 *u*、*e* に於ては動詞「得る」自身の語基以外は何も保有されないと云ふ事に鑑みてみて、此説が説明し得るであらう最大のものは、第二活用動詞の不定及び終結形なのである。此故に語尾 *u*、*e* と動詞「得る」形 *u*、*e* の比較なるものは更に前者を説明し得る事とならうが、何とならば是は未知のものを既知のものと同一視する事となるからである。

併しながら若しも動詞形 *u*、*e* に於て其實體意義が最初に出現し、其次に既に其形式意義が行はれるとすると、如何にして同一單一語基の音聲變種が様々の形式意義を獲得したか、そして何が故に例へば、が終結形の *u*、*e* が不定形

の意義を獲得しなかつたのかと云ふ問題が生ずる。

勿論何人も性質自身中に、は其が終結形、*ゐ*は不定形となるを許容しなかつた何物かゝあつたのであるとは斷言しないであらう。類似言語學的見解の時代は夙に過ぎ去つた。併しながら其を妨げ得たであらう何物も其等の性質自身中には無かつたのだとすると、其は明確に、*ゐ*をして不定形の意義を、*ゐ*をして終結形の意義を獲得させた或物が、其等の性質外では存したのだと云ふ事になる。此外部力には類推の法則によつて其等が含入された動詞形既存組織のみが成り得たのである。

換言すれば、若しも、及び *ゐ* が不定及び終結形の意義を獲得したとすると、其は第二活用動詞組織に於ける是等の形の語尾には最早對應的に音聲質、及び *ゐ* が存してゐたが故に起つたのである。此音合同〔*zvukovoe soyvadenie*〕の爲に、一方では不定形へ、他方では終結形への語基音聲變種の固定が起つた。其等の音聲分化が其等の形式分化へ導いたのである。

が若しも左様だとすると、「得る」説は第二活用動詞の不定及び終結形語尾 *さへ* をも説明しない事になるのであつて、却て、是等の形の語尾が動詞「得る」の語基音聲變種二箇 *ゐ*、*ゐ* の形式分化を説明するのだと云ふ事が示されるのである。

第四節 「得る」説の唯一的且偶然的根據としての動詞「得る」形 *им, могу, могу* と

第二活用動詞語尾との音聲合致【一六一七頁】

前述凡ては、第二活用動詞語尾「得る」説なるものは Aston 式解説に於ては堅實なる形態根底を有せざるのみならず、却て、形態的の矛盾と缺陷とに充滿してゐると云ふ事と、同説は、第二活用動詞對應形語尾と誤認されるものと動詞形 *u, uru, e, eru* 「得る」との同音聲合同 (*fonetiskoe sopadenie*) のみに基いてゐると云ふ事を表してゐる。現代言語學は、同音聲的のみの合致なるものは大抵偶然であるが故に、僞瞞であるが故に、是に立脚せる全形態結論に對しては絶對的に警戒するのであるから、此「得る」説の同音聲根據は不完全であるのみならず、打明けて言へば、同説に充分なる疑惑を感じしめるのである。

第五節 第三活用動詞語尾・*iru* と動詞 (*u*) *iru* 「居る」との Aston による同一視【一七頁】

其他、所謂第三活用動詞語尾・*iru* は多分動詞 (*u*) *iru* 「居る」の對應形に外なるまいと云ふ Aston の推測が第二活用動詞語尾「得る」説以上には批判に堪へないと云ふ事は、語る必要もない。是は「得る」説と同様の音聲合同に立脚してゐるのであり、同上説に對しては遙かに非難しない譯には行かないのであるが、何とならば動詞 (*u*) *iru* は *winu* と書かれるからであつて、是は (*u*) *iru* が第三活用動詞に於ける・*winu* と音聲的には合同するかも知れない形式・*winu* を有しない事は最早言ふ迄もないとして、古代日本語に於ては現今の如き *iru* でなく・**winu* と發音されてゐたと云ふ事を意味するからである。所與の場合に於ては Aston は *u*・**winu* から出た第三活用動詞に於ける・*iru* と・*uru* と

の形成可能を單に氣儘に認容してゐるのである。

第六節 動詞「得る」の變格に就ての Chamberlain と其誤謬【一七一八頁】

今度は「得る」説の Chamberlain 式解説に轉するが、私は何よりも先づ動詞 *un, en* 「得る」に關する彼の見解に停滯する。彼曰く「其唯一的變格と云ふのは、消失したる文字 *Teater* と云ふのは *Aston* と同じく舊式言語學術語用法である」。(註) は其現在語基なのであるから、其が(少くとも外見上は)語基を有しないと云ふ事に存する。其は五四―五七頁【増訂版では六三―六六頁】に前掲の第二活用活用例語尾、特に不定形 *~* 及び *~* 等から成立してゐるに過ぎないのである」。(註)

上爲の註解の後では、獨立動詞「得る」の Chamberlain に於ける前掲形は同語尾のみから、即ち同形式附屬物のみから成立する事は出來ないと云ふ事を、論證する必要はない。是等全形が語尾のみであるとしたならば、其等の一つもが實體意義を有しない事とならう、即ち動詞「得る」と連結された表示を表現しない事とならう。従つて、是等の形の各々に於ては動詞「得る」の實體(現實的)意義の擔當物である語基附屬物が保有されてある譯なのである。

が若し、Chamberlain の推測する様に、*~* (*un, en*) が語基であるとしたら、是は *~* と *~* とは形式附屬物に過ぎない、即ち「得る」なる表示への如何なる關係をも有しないだらうと云ふ事を意味する。併しながら其等が語尾に過ぎず、動詞「得る」自身ではなかつたのであり、そしてないのであるとすると、第二活用動詞語尾「得る」説は根本に於て破れる

譯なのである。

第七節 Chamberlain の解説に於ける第二活用動詞語尾「得る」説【一八頁】

併しながら、*u* (Jot) が動詞「得る」の語基であつたと Chamberlain に吐露された意見から出て来る此當然な結論にも不拘、彼は矢張り第二活用動詞は動詞 *uru*, *eru* の助力に由つて形成されたと見做してゐる。

彼曰く「第二活用は語基へ *eru* (又は *uru*) 「得る」の膠着によつて得られた派生的なものである……若干の場合に於ては、特に受身動詞に於ては *eru* なる斯かる用法は頗る論理的であるが(『日本口語文法』第三〇四節對照)、日本語の接尾辭果積への偏好性なるものが斯かる必要の存しなかつた他の多くの場合に於て *eru* を添加させた。かくて

<i>uru</i>	「觸る」	は變じて	<i>ururu</i>
<i>kakuru</i>	「隠る」	〃	<i>kakuruu</i>
<i>kamu</i>	「兼ね」	〃	<i>kameru</i>
<i>midaru</i>	「亂る」	〃	<i>midaruru</i>
<i>osoru</i>	「恐る」	〃	<i>osoruu</i>
<i>taru</i>	「滴る」	〃	<i>taruru</i>

少からざる場合に於て、一は自動、他は他動の二動詞が、前者へは *uru* を後者へは *eru* を膠着する事によつて、

唯一的なる本源的「第一活用」形から得られたのであつて、例へば

kasamu 「重ぬ」 *kasamaru, kasumeru,*

tasuku 「助く」 *tasukaru, tasukeru,*

todomu 「留む」 *todomaru, todomeru.*

凡て是は單なる假説ではなくて、現今では第二活用に算入されてある殆ど各非受身動詞の第一活用形を維持した萬葉集及び他の古代典籍では保有されてゐる古風文學遺物に基いての實際の論證に従ふ事實なのである。⁽⁶⁾

第三活用動詞に關連して彼は次の様に言つてゐる。「或動詞が第三活用形成の爲に第一活用から移つた推移過程は左程明白ではないが、第三及び第二活用が單なる相互變種であると云ふ事はあり得る」。⁽⁷⁾ 換言すれば、彼は、第三活用動詞語尾又は語尾と誤認されてゐるもの、即ち *-iru* は多分所謂第二活用語尾 *-eru* の音聲變種であらうと、認容し度がつてゐるのである。

第八節 Chamberlain の見解に關する批判的註解【一九二〇頁】

Aston の見解に關連する上述全部の後では、Chamberlain の解説に於ける「得る」説の詳細なる吟味に従事する必要がないのは勿論である。が矢張り此説の眞實の特徴を露出する或場所は指摘しない譯に行かない。或動詞に於ては(特に受身の) *eru* の儼存は充分論理的であるが、他の動詞に於ては餘分なものであると Chamberlain は斷言してゐる。

る。是は Chamberlain が *-eru* を動詞 *eru* 「得る」と同一視する根據の標準となるのは論理學であつて、形態論ではないと云ふ事を意味する。論理學と言語形態論とは同一でないといふ事、及び論理學の助力に由つて言語學的形態論の諸問題を解決するのは、論理學の諸問題を後者の助力に由つて行ふのと同様、不可能であると云ふ事は言ふ迄もあるまい。Chamberlain の解説に於ける「得る」説も亦 Aston の解説に於けると同様、形態基礎を有しない事は此故に明白なのである。

是は就中、彼も亦 Aston と同様な形態誤謬を犯してゐると云ふ事によつて、確められる。第二活用動詞現在時終結及び限定形を Chamberlain が閉語基プラス語尾 *-u* 及び *-uru* に分析するのを、吾人は第二章劈頭に於て見た譯である。かくて、彼が上方で語つてゐる第二活用動詞も亦閉語基プラス *-eru* 即ち例へば *juuru* は $\langle juu + eru \rangle$ から、*kuuru* は $\langle kuu + eru \rangle$ 等から成立せねばならなくなる。同様に例へば受身動詞 *mireru* も亦 $\langle miru + eru \rangle$ 即ち閉語基 *miru* プラス *-eru* に分裂しなければならなくなるが、動詞 *eru* の助力に由つて受身動詞の派生を知らず爲に彼が割當ててゐる其日本口語教科書第三〇四節では *mireru* は $\langle miru + ari + eru \rangle$ から形成されてゐると言はれてゐる。換言すれば、彼は Aston と同様な形態矛盾に陥つてゐるのである。

結局 Chamberlain の解説に於ける「得る」説なるものは、論理學の外に、偶然的音聲合同を未だ根據としてゐる。かくて例へば、自動詞に於ける *-eru* は音聲的に動詞 *aru* 「在る」と同一であるが、對應他動詞に於ける *-eru* は音聲的に動詞 *eru* 「得る」と同一であるからと云ふだけで、Chamberlain は前者(例へば *kasuuru*, *tasukaru* 等)は動詞 *aru* の助力によつて形成されてゐるが、後者(例へば *kasuuru*, *tasuuru*)は動詞 *eru* の助力によつてゐるのである。

と陳べてゐる。偶然的音聲合同の上に建てられた類似論理的瞑想が如何なる價值を有するやを、吾人は以上に於て見た次第なのである。

併しながら、其日本口語文法に於て Chamberlain が第二活用動詞語尾「得る」説を恰も部分的には拋棄してゐるのを指摘しない譯に行かない。三箇の口語活用 *-ru*、*-eru* 及び *-iru* とそして文語に於て後者二箇に對應する語尾 *-uru* に就て彼曰く「是等語尾の起源は不明である」⁽⁶⁾ が同時に同上教科書に於て彼は受身動詞に於ける語尾 *-are* を動詞 *aru* と同一視してゐる。⁽⁶⁾ 従つて、或第二活用動詞に於ては此所謂語尾 *-aru* の起源は不明とはならない。凡て是等の矛盾を調和さすのは随分徒勞な課題であらうし、且其は必要でもないのである。其に對しては其口語教科書の序文に於て彼は Aston の日本文語文法を「異常に輝しい著作」【*admirably lucid work*】として熱心に推舉してゐるし、第二活用動詞語尾「得る」説が丁度解説されてもある自分の琉球語に就ての著作をも亦指示してゐるのである。

第九節 歐文法による「得る」説の採用【二〇頁】

日本口語の最良佛文法の著者 Balet は、「得る」説を墨守しつつ、Chamberlain が展開してゐる琉球語に就ての Chamberlain の著作を丁度引證してゐるが故に、是等語尾の起源は不明であると云ふ Chamberlain の上掲論斷を文字通りには理解しようとしないう様に見える。⁽⁶⁾

他の著者達も Chamberlain の此論斷に對しては注意を向けてゐないが、何とならば彼等は第二活用語尾「得る」説

を充分理解してゐないからである。成程、彼等の誰もが此説の脈絡ある解説を與へてゐないし、其根源に於ては何等の新しいものをも持込んでゐないが、箇々の註解の中から此説への確實なる關係が充分見られる。かくて例へば G. Spalvin 教授^⑤や G. B. Sansom^⑥は、例へば *yukuruu*, *tuuru*, *tokuru*, *kikojuru* 等の如き受身、使役及び自他の全動詞語尾に於て動詞「得る」*uru* を發見してゐるのである。

此故に、此「得る」説が日本語現代歐文法や日本語を研究又は教授する人々によつても亦採用されてゐる限りは、Chamberlain がたとへ部分的にもせよ此説を拋棄したか否かは、吾人にとつて概して最早左程重要ではない。兎も角併し其特別な矛盾に錯雜してゐる此形態不成立説の採用によつて、第二活用動詞現在時文語限定形語尾は、*-ru* 又は *-ru* として現在又は未來時の對應口語形語尾は、*-eru* 又は *-ru* であると云ふ事に就ての問題に於ては、上示の二重性が著しく説明もされる次第なのである。

第十節 「得る」説と「得る」動詞相形成性とに連結する第二活用動詞現在時語尾【二一頁】

「得る」説と連結させられた第二活用動詞現在時語尾に就て上述せる凡ては、概観すると次の様に摘要する事が出来ると思ふ。

第一に、文語に於ては、*-ru* が第二活用動詞現在時終結形語尾と見做され、*-uru* 又は *-ru* が限定形語尾と、口語に於ては *-ru* 又は *-ru* が現在又は未來時語尾と見做される。

第二に、語尾 *-u, -uru, -eru* は動詞「得る」形 *u, uru, eru* と同一視される。

是は現在時が此説に従ふと動詞「得る」を表現すると云ふ事を意味するのである。

第三に、此動詞「得る」は自他、受身・可能及び使役全動詞形成に關與する形態質と見做されるのであつて、又は換言すれば、正反對的相形成性が該動詞に付與される。

かくて、同一形態質 *-u, -uru, -eru* には、時を表現する能力、即ち行爲が生ずるのは談話の瞬間に於てか、迄にか又は後にであるかと云ふ指示と、相を表現する能力、即ち動詞の語基によつて標記された行爲の主體と客體との間に於ける其々の關係との、二重の機能が付與されるのである。

併しながら、若しも *Asou* の見解の吟味に際して上示した様に「得る」説が實際成立しないのならば、時を表現する能力とそして斯かる相互除外的相形成性とを動詞「得る」に付與する可能性は當然消滅して了ふのである。

第十一節 第二、第三及び第四活用動詞現在時語尾に就ての問題は未決の儘である【二二頁】

此説の形態不成立性を顯す自分の行つた註解は此説を拋棄するに充分でもあると云ふ事が勿論あり得るとはしても、此説の拋棄なるものは矢張り、特に第二活用動詞現在時限定形語尾及び其對應口語形語尾は *-uru* 又は *-tu, -eru* 又は同じ *-mi* 又は何か他の例へば同じ母音聲質 *mi* のみであると云ふ事に就ての問題を未だ解決してゐない。

此外に、*-nu* 又は *-nu* が、*-nu* 又は *-nu* が、又は *-nu* こそが語尾であるのかと云ふ、第三活用動詞同上形語尾に就ての問題も亦、未決の儘になつてゐる。*-nu* 又は *-nu* が此處では語尾であらうかと云ふ第四活用動詞と共に亦問題が存するのである。

一言もてすれば、動詞形と呼ばれるものの語尾であるものに就ての問題に於ける上示の矛盾は、此問題の語尾解決に就てでなければ、此解決へ導く道程の目標を作ると云ふ事に就いて考へさせるのである。

註

- 1 W. G. Aston. *A Grammar of the Japanese Written Language*, pp. 90—91 【再版本 pp. 98—99】。【以上一三頁】
- 2 B. H. Chamberlain. *A Simplified Grammar*, p. 74 【増訂本 pp. 85—6 又は却つて三語省略されてゐる】。【以上一七頁】
- 3 B. H. Chamberlain. *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*, p. 144.
- 4 同上 p. 145. 【以上一八頁】
- 5 B. H. Chamberlain. *A Handbook of Colloquial Japanese*, p. 165.
- 6 同上 p. 304, p. 199.
- 7 Baier. *Op. cit.*, p. 129.
- 8 *Op. cit.*, pp. 12, 103, 129.
- 9 *Op. cit.*, pp. 154, 160—161, 165, 199. 【以上二〇頁】